

古墳時代における佐紀盾列古墳群

①最初に

1. 「ならなぎ」コースガイド資料の佐紀盾列古墳群記述

奈良盆地北部に展開する佐紀盾列古墳群（東西2.5km、南北1.5kmの範囲）は、奈良盆地東南部の大和古墳群、大阪平野の古市古墳群、百舌鳥古墳群と並ぶ大古墳群です。古墳時代区分の前期から中期にかけて造営された全長200m以上の巨大前方後円墳7基（五社神古墳、佐紀石塚山古墳、佐紀陵山古墳、市庭古墳、ヒシアゲ古墳、コナベ古墳、ウワナベ古墳）と、中、大型前方後円墳（佐紀高塚古墳等）、これらに随伴する陪塚（ばいちょう）群で構成されています。巨大古墳のすべてと、一部の中・大型前方後円墳、陪塚が陵墓もしくは陵墓参考地として宮内庁の管理を受けています。

佐紀盾列古墳群は4世紀末から5世紀後半にかけて造営された巨大古墳群。巨大古墳群の変遷からみれば、大和盆地東南部の大和・柳本古墳群（行燈山古墳、渋谷向山古墳など）から河内の古市古墳群、百舌鳥古墳群に移る中間になる。このことから、王権が盆地東南部⇒盆地北部（佐紀）⇒河内へ移動していったという王朝交替説、そうでなく大王墓の墳域が移動しただけという説、現在でも決着していないようです。

巨大古墳の時代別分布

時代	前期			中期	後期		
	前葉		後葉		前葉		後葉
年代	260-320	260-400	360-400	400-470	470-520	470-600	550-600
古墳数	38	321	103	165	107	733	45
200m以上	2	8	11	7	0	0	1
	5%	2%	12%	4%	0%	0%	2%

それでは以上のコースガイド資料の記述内容を図や表で見てみよう。

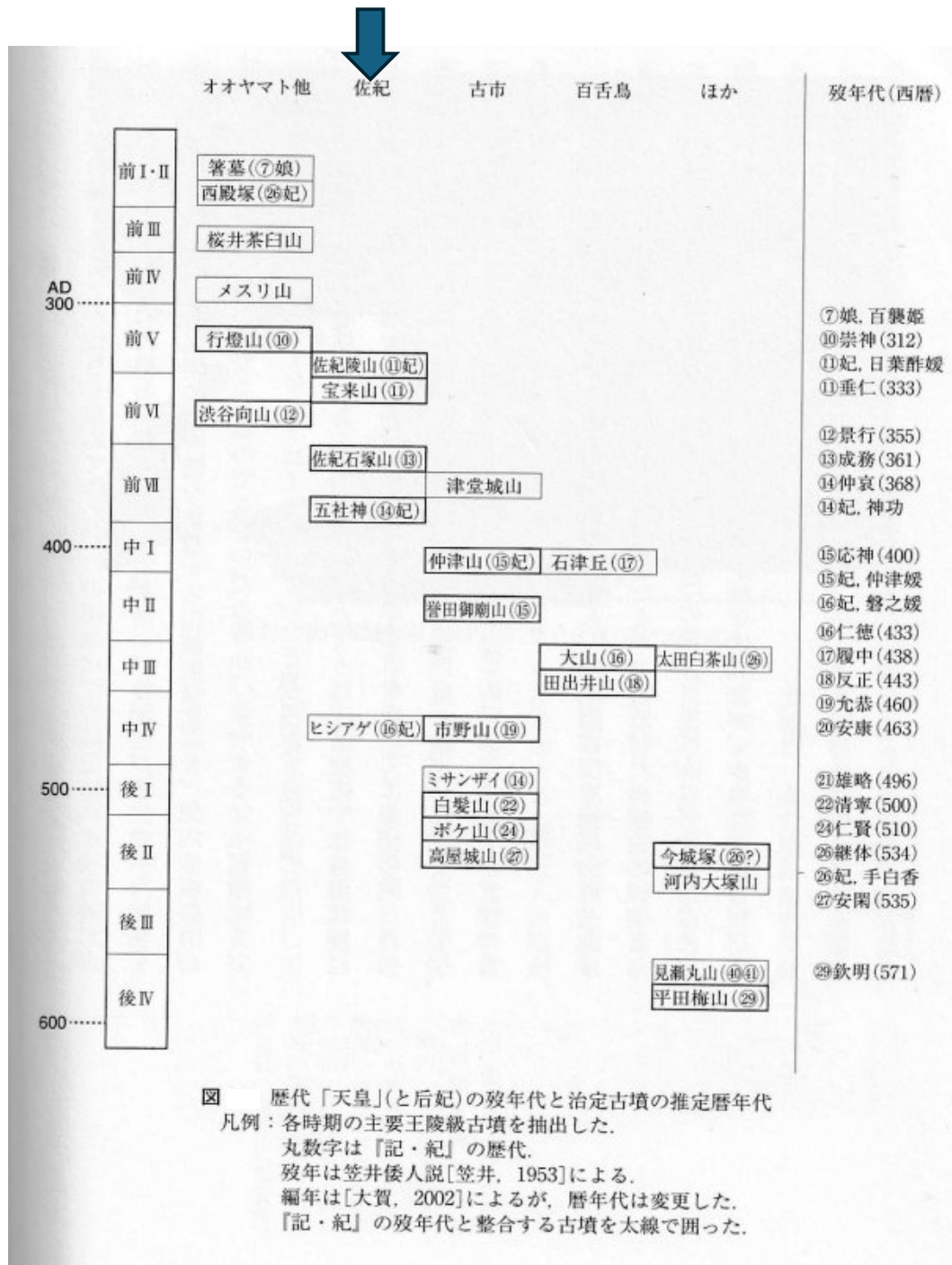
2. 佐紀盾列古墳群の分布



これら古墳群の歴代天皇・妃の治定と天皇系図は当会の山岡さんが「歴史文化研究会」で分かり易い図表で発表されている(歴史文化HP参照)。

次に古墳時代における佐紀盾列古墳群の年代における位置付けを見てみよう。

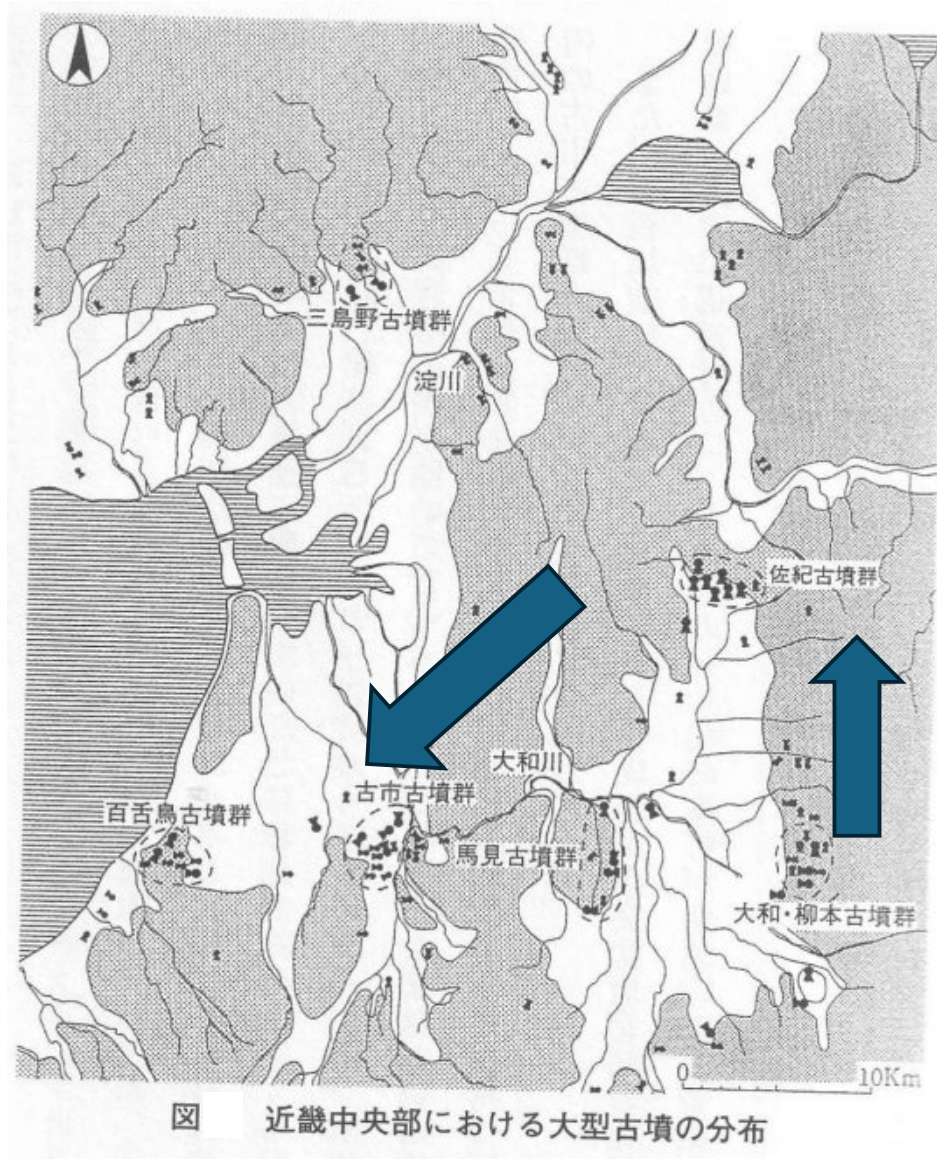
3. 古墳時代の年代における佐紀盾列古墳群



以上の様に佐紀盾列古墳群は3世紀中葉に大和（オオヤマト）古墳群の箸墓古墳から始まった古墳時代が4世紀中葉奈良北部に移って古墳群を形成していった。ただし、ヒシアゲ古墳は5世紀後葉に築造されている。その後巨大古墳群は4世紀後葉から古市、百舌鳥古墳群に移動していく。

この様に大型前方後円墳が築造年代毎に場所を移動していく現象は当該期に政権が交代したからではないかとする説が有力である。

下図に大阪と奈良の大型前方後円墳分布を示す。



②古墳時代とは

1. 古墳時代の定義

古墳時代とは定型的な企画で築造された前方後円墳による政治権力のネットワーク形成という歴史的画期を意味する。

考古学の時期区分では、古墳時代前期（およそ3世紀後半から4世紀中葉）、中期（4世紀後半から5世紀中葉）、後期（5世紀後半から6世紀末ないし7世紀初頭）の3区分が一般的である。

前期は、定型的な企画で造られた前方後円墳の誕生から始まる。定型的前方後円墳とは、定型的ないし定式化した墳丘形態・埋葬施設・副葬品を備えた前方後円墳を指している。定型的墳丘形態とは、正円形の後円部に左右対称の前方部つき、前方部・後円部とも段築を持って構築され、最初期のものでは前方部の左右がバチ形に開く形態を言う。それだけではなく、**奈良県箸墓古墳を3分の2にすると木津川椿井大塚古墳に一致し、岡山県茶臼山古墳は2分の1、などと遠隔地どうしの古墳が整数比の同一規格で構築されている。**

中期になると、主たる王陵が奈良盆地から大阪平野南部へと移動し、軍事的性格が強くなる。後期には王陵を除く大型前方後円墳がほぼ消滅する一方、新興勢力の前方後円墳と群衆墳が出現する。そして、前方後円墳の消滅以降を飛鳥時代とし、この時

期の墳丘墓を「終末期古墳」と呼んでいる。

2. 古墳時代前夜（前方後円墳は何故生れたか）

弥生後期になると、中国地方で弥生時代の特徴の一つである青銅器祭祀は一気に低迷し、替わって後期中頃以降になると墳丘墓が特徴的に現れてくる。近畿地方から中国地方までの青銅器祭祀は、本来的には農耕儀礼として行われた集団の宗教儀礼であり、それを執行する司祭者が特別な役割を演じるとしても、その人物がそのまま社会的に優位な位置にあるわけではなかった。つまり、弥生中期の社会ではあくまで有力家族墓であり、特定の被葬者が格別な扱いを受けたということではなかった。

しかし、弥生後期の前半ないし中頃になると北近畿から中国地方にかけては格別な扱いを受ける個人が出現する。北九州では弥生前期に既にあらわれ、中期初めになると有力者集団が一つの墓域を構成して、その中に突出した扱いを受ける人物が登場する。中期後半には特定の個人が独立した墓域を画し、舶載品である漢鏡を多数副葬する「王墓」と呼ぶにふさわしい墓が登場する。

近畿地方を中心とした地域では主に方形の墳丘墓が造られていた。弥生前期～期中葉（前六、五世紀～前二世紀頃）では墳丘墓の差は少なかったが、中期後葉～後期前半（前一世紀～後一世紀頃、第二段階）になると、他よりひととき大きなもの（墳長20m以上）が出現し始めた。言い換えれば、農耕を営む均質的な集団の中に特定の有力者（首長）がしてきた。それと共に、墳丘墓の階層差や地域差が目立ち始め、後期後半～終末期（二世紀～三世紀前葉、第三段階）には、その傾向が一層顕著になっていった。



首長の墓として、台状墓が発達していた日本海側の山陰で四隅突出型方形台状墓が、近畿北部では方形台状墓が、北陸では各要素が複合する形で作られていた。少数ではあるが、瀬戸内中央部では円丘の左右に突出部つく双方中円形の台状墓も造られた。

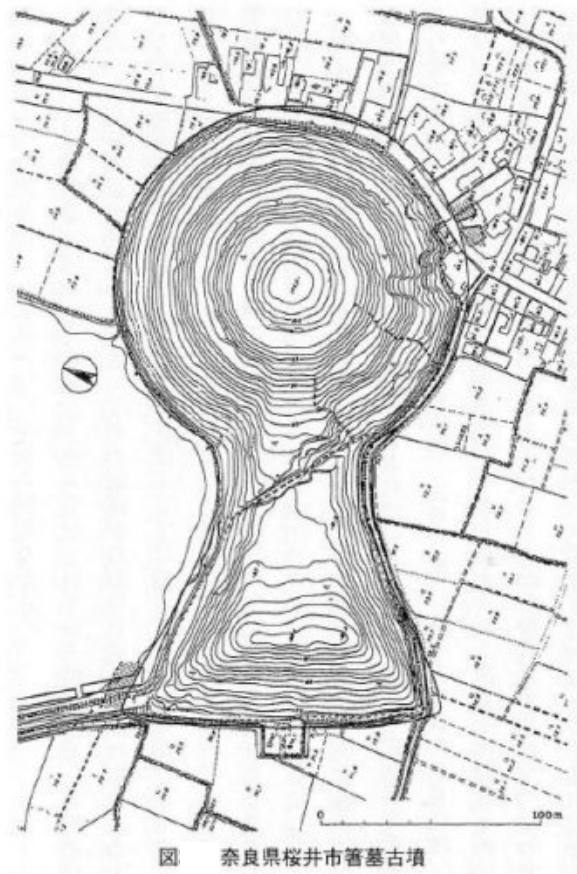
言い換えれば、西日本の各地域に出現してきた首長たちは、地域ごとに政治的なまとまりを形成しはじめ、それに応じて、他地域とは異なる自らの墳丘墓様式を作り出し、共有するようになっていった。その中で特定の地域を越えて広がったのが前方後方形と前方後円形の墳丘墓であった。

3. 前方後円墳の創出と古墳秩序の形成

以上のような前史を踏まえ、誕生したのが奈良県桜井市箸墓古墳である。この古墳

には、前方後円形の墳丘、周溝墓、葺石、埴輪の祖型となった特殊な墳丘儀礼用土器（壺やそれを載せる器台）など、弥生時代の各地の墳丘墓に備わっていた諸要素が採用されていることから、それらを統合して新たな「古墳」様式が創出したと考えられる。その様式は変化しながらも古墳時代の終わりまで継承されていった。

その後、各地で首長墳としての古墳が数多く築かれたが、大王墳はその規範となった。そして、各地の前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳は、基本的に共通の様式のもとに、墳丘の形と規模を主な基準とする。格差の大きい序列的で階層的な秩序を形成しつつ築かれることになった。この古墳の秩序を成り立たせていた政治勢力が、考古学でいうヤマト王権であり、墳丘の形と規範は王権内における被葬者の政治的身分を表していたと考えられる。



従って、箸墓古墳は大王の出現と、大王を頂点とした政治体制（首長連合体制）であるヤマト王権の出現を端的に示すものにほかならず、ここに前方後円墳時代が始まったといえることができる。

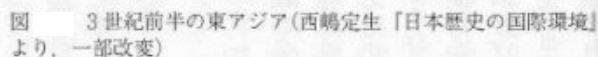
4. 古墳時代の中期から後期へ

古墳時代の中期から後期への過程で、中期の大型前方後円墳を擁する大古墳群や、それと政治的につながっていた中小の古墳群は急速に衰退・消滅していった。この現象は大王墳をも巻き込み、その規模は200m以上のものから突然120m余のものへと縮小した。この時、王権の権勢は、たとえ一時的ではあっても、かなり弱体化したと思われる。しかし、大王墳は再び巨大化し、後期中葉には約190mの今城塚古墳、後期紅葉には310m以上の奈良県橿原市見瀬丸山古墳などとして築かれた。

一方、首長墳としては、新しい墓域で一時的に中小の前方後円墳が増加したが、後

この現象は、後期中葉後半以後、大王権の強化、首長の官僚化、共同体構成員の公民化が進行し、新たに中央集権的な国家の形成が始まった。

1. 邪馬台国はどこにあったか



古代史の国民的な話題となっているのが邪馬台国はどこにあったのか、という邪馬台国所在論争である。邪馬台国の所在地をめぐるのは、古くから東京系学者の九州説と、京都系学者の近畿説(大和地域説)があり、激しい論争が繰り返されてきた。

図1 「混一疆理歴代国都之図」を簡略化した地図

倭国統合化のプロセスを考察する文字史料はないので、考古学研究の成果から推測すると、一世紀前後漢から朝鮮半島を經由して輸入された「漢鏡」は九州か

ら近畿地方に均等に分布していたが、**二世紀半ば以降になると四国東部から近畿に集中するようになる。つまり朝鮮半島から各国へ流通していた鏡が、直接近畿地方にもたらされ、そこから各国へ分配されるようになる。漢鏡は各地域の首長権を象徴する宝器であるが、その分配権を近畿地方の首長が握ったことは、この地域が列島の政治的センターになっていたことを意味する。**

卑弥呼が魏の皇帝から贈られた「銅鏡百枚」に画文帯神獸鏡がふくまれており、その分布の中心は近畿地方である。こうした考古学的研究成果を積み重ねていくと邪馬台国は近畿地方となる。

一方墳墓の形態からみると、②3で前述したように弥生時代終期に奈良盆地東南部において前方後円形の墳丘墓で、後の前方後円墳に発展する「纏向型前方後円墳」が造られる。やがて前方部が発展し、古墳時代の定型的企画である前方後円墳が築造されることになる。そして、全国的に普及していったということはそれらの地域を一つにまとめる政治的連合体が生まれたことを意味する。こうした中で、卑弥呼が存在した三世紀初頭には邪馬台国が倭国の盟主になっていった。この邪馬台国は奈良盆地東南部の可能性が高い。**2009年桜井市の纏向遺跡(三世紀初頭から四世紀前半の遺跡)で、三世紀前半の遺跡中心地で3棟の大型建物群が発見された。邪馬台国時代における卑弥呼に関連する施設の可能性をはらんでいる。**

次に邪馬台国の読みかたを調べてみる。「邪馬台国」は「やまたいこく」と呼ぶことが少なくないが実は当時の読み方ではない。「邪馬台国」の4字のうち上代特殊仮名遣いに関係する「台」は乙類で「と」とよむ。**つまり「邪馬台国」は「やまと国」が本来の読み方である。「やまと」も特定の地域を指すものと思われるが、「やまと」の地名は全国各地にある。近畿地方の「大和」は上代特殊仮名遣いの乙類の「と」、九州の旧筑後国山門(やまと)群や旧肥後国菊池郡山門群は甲類の「と」となる。音節でいえば近畿説が有利となる。**

以上の検証より「邪馬台国」は近畿地方、とりわけ桜井市纏向遺跡が濃厚となる。

九州説の根拠

邪馬台国九州説では、福岡県の糸島市を中心とした北九州広域説、福岡県の御井群、福岡県太宰府、大分県宇佐神宮、宮崎県の西都原古墳群、熊本県の球磨郡等諸説が乱立している。九州説の基本論拠は下記である。

- ・帯方郡から女王国までの距離を直線距離ではなく、行程だと考えれば12,000里のうち、福岡県内に比定される伊都国までで既に10,500里使っていることから、残り1,500里では邪馬台国の位置は九州地方から出ないとされる。
- ・邪馬台国と対立した狗奴国を熊本の勢力と比定すれば、狗奴国の官「狗古知卑狗」が「菊池彦」の音訳と考えられる。 等々

2. ヤマト王権の成立

日本列島の政治的統合のプロセスを時系列的に位置づけると、

- (1)倭国としての統合の展開（一世紀末から二世前葉）
- (2)近畿地方を中心とする定型的企画を持つ前方後円墳秩序の形成（三世紀中葉～後半）
- (3)ヤマト王権の成立（四世紀前半）

ヤマト王権の誕生は四世紀前半と想定されるので三世紀半ばの邪馬台国とヤマト王権との直接的関係は不明である。既に述べたように、邪馬台国は奈良盆地東南部にあたる桜井市の纏向遺跡が有力な候補地の一つである。三世紀に最盛期を迎えた纏向遺跡は、四世紀前半になると遺構の数が極端に減少する。そのためヤマト王権の発祥地と

しては相応しくない。

ヤマト王権の成立に当たっては、それ以前にすでに前方後円墳を築造する政治的秩序が形成されており、それを継承している。**初代の天皇とされているのは記紀から崇神天皇(記紀では第10代)とされており、その天皇陵である崇神天皇陵古墳は、行燈山古墳と比定されている。第2代天皇は垂仁天皇となり、佐紀盾列古墳群の南西にある垂仁天皇陵(宝来山古墳)が比定されている。このようにヤマト王権が奈良県東南部に成立したといえる。**



以上

引用文献：岩波書店刊 シリーズ日本古代史①「農耕社会の成立」石川日出志
岩波書店刊 シリーズ日本古代史②「ヤマト王権」吉村武彦
岩波書店刊 シリーズ古代史をひらく「前方後円墳」吉村武彦他編
吉川弘文館刊 「近畿の古墳と古代史」白石太一郎

年 表

略年表		
「王名・年号」は『日本書紀』『続日本紀』の紀年を示す		
西暦		中国
8	・前漢滅亡 王莽、新を建国	新
14	・新が貨泉を鑄造する	
25	・後漢の建国	後漢
57	倭の奴国が後漢に朝貢し、金印(「漢委奴国王」)を授与される	
107	倭国王帥升らが、後漢の安帝に生口160人を献じて請見を願う	
146	桓帝(146-167)・靈帝(167-189)の間、倭国大乱という	
184	中平□年銘大刀(東大寺山古墳出土)	
204	・この頃、公孫氏、楽浪郡の南に帯方郡を設置	
220	・後漢滅亡 魏の建国	魏
238	呉の赤烏元年銘神獸鏡(鳥居原古墳出土)	
239	倭の女王卑弥呼が魏に難升米を遣わし、「親魏倭王」を授与される 景初三年銘神獸鏡(和泉黄金塚古墳他出土)	
240	魏使が倭国王に接見 景初四年銘盤竜鏡(広峯15号墳出土)・正始元年銘神獸鏡(森尾古墳他出土)	
243	倭王が魏に使者を遣わす	
244	呉の赤烏七年銘神獸鏡(安倉古墳出土)	
245	魏が難升米に黄幢を与える	
247	倭の女王卑弥呼が、狗奴国と対立し、帯方郡に使者を派遣 魏使が倭に来て黄幢と檄を与える	
248	卑弥呼没 壺与(台与)が即位する	西晋
291	元康元年銘神獸鏡(伝上狛古墳出土)	
369	泰□(和)四年銘という七支刀(石上神宮)	東晋
391	倭が百済と新羅を破り、臣民にするという	
399	倭が百済と和通し、新羅国境に進出する	
400	倭が新羅に進出し、高句麗と戦って敗退する	
404	倭が帯方地域に進出し、高句麗と戦って敗退する	
413	倭国が東晋に貢物を献ずる	
420	・宋の建国	宋
421	倭讃が宋に入貢し、安東將軍・倭国王に任じられる	
425	讃が宋に司馬の曹達を遣わし、上表して方物を献ずる	

西暦		中国
430	倭国王が宋に方物を献ずる	
438	宋が、珍を安東将軍、倭国王に任命 倭隋らが平西、征虜、冠軍、輔国将軍に任命される	
439	・北魏の太武帝、華北を統一	
443	済が宋に朝貢し、安東将軍、倭国王に任命される	
451	宋が、倭国王倭済を使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東将軍、倭国王に、23人を軍部に任命する ついで済が安東大將軍に進号される	
460	倭国が宋に方物を献ずる	
462	宋が倭国王世子興を、安東将軍・倭国王に任命する	
471	獲加多支鹵大王の名を記した「辛亥」年銘鉄剣(稻荷山古墳出土)	
477	倭国が宋に方物を献ずる	
478	武が宋に上表し、使持節、都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事、安東大將軍、倭王に任命される	
479	・宋滅亡 齊の建国	
502	・梁の建国	
503	癸未年銘人物画像鏡(隅田八幡神社)	

西暦	王名・年号		中国
507	継体 1	継体(応神5世孫)が越から来て、河内の樟葉宮で即位	北魏
508	2	武烈を大和の片岡に葬る	
509	3	伽耶在住の百済の百姓を、百済にもどす	
510	4		
511	5	都を山背の筒城に移す	
512	6	穂積押山を百済に遣わす 伽耶の4県を百済に割譲する	
513	7	百済が五経博士を貢上する 百済に己汶・帶沙を割譲する 勾大兄が立太子	
514	8	・新羅の法興王が即位	
515	9	倭国軍が伽耶の伴跋国に敗れる	
516	10	百済が五経博士を交代させる	
517	11		
518	12	都を弟国に移す	

西暦	王名・年号		中国
519	13		
520	14	・新羅が律令を定めるという	
521	15		
522	16	・伽耶の国王が新羅と通婚する	
523	17		
524	18		
525	19		
526	20	都を大和の磐余に移す(別伝に7年)	
527	21	筑紫君磐井の乱 近江毛野らの倭国軍の伽耶派遣をはばむ	
528	22	物部麁鹿火、磐井を斬殺 磐井の子葛子が屯倉を献上する	
529	23	近江毛野の伽耶派遣は失敗する	
530	24		
531	25	継体没 「百濟本記」に「日本天皇・太子・皇子没」とある	
532		『上宮聖徳法王帝説』等では、欽明元年にあたる	
533			
534	安閑 1	武蔵の国造位をめぐり争いがおこる 国造笠原直使主が屯倉献上 ・東魏の建国	東魏
535	2	多くの屯倉設置がある 諸国に犬養部をおく 宣化即位	
536	宣化 1	筑紫の那津に官家をおく	
537	2	大伴狹手彦を派遣し、伽耶と百済を救援する	
538	3	『上宮聖徳法王帝説』等では、百済から仏教が伝わる	
539	4	欽明即位	
540	欽明 1	秦人らの戸籍を造るという 大伴金村が伽耶問題で失脚	
541	2	百済で伽耶復興策を協議する	
542	3		
543	4		
544	5	ふたたび百済で伽耶復興策を協議する	
545	6		

西暦	王名・年号		中国
546	7		
547	8	百済が救援軍を要請する	
548	9	百済に 370 人を遣わし、築城をたすける	
549	10		
550	11	百済が高句麗の捕虜を献上する ・北斉の建国	北斉
551	12	・百済が高句麗と戦い、旧都を回復する	
552	13	百済の聖明王が仏教を伝える 崇仏・排仏の争い がおこる	
553	14	百済から軍兵を要請される 百済に医・暦博士ら の派遣を要請	
554	15	百済が救援を要請し、五経博士の交代と医・暦博 士らを派遣する	
555	16	百済が聖明王の戦死を伝える 吉備に白猪屯倉を おく	
556	17	吉備に兎島屯倉をおく	
557	18		
558	19		
559	20		
560	21	新羅が朝貢する	
561	22	新羅が朝貢するが、席次に怒って帰国し、倭国の 攻撃に備える	
562	23	・新羅が伽耶諸国を滅ぼす	
563	24		
564	25		
565	26		
566	27		
567	28		
568	29		
569	30	白猪胆津を白猪屯倉に遣わして田部の丁籍を調べ、 田戸とする	
570	31	蘇我稲日没 高句麗の使人が越に漂着する	
571	32	新羅に使者を遣わし、伽耶を滅ぼした理由を問う	
572	敏達 1	敏達即位 王辰爾が高句麗の国書を読み解く	